

細井広沢 『観鷺百譚』 解題

永 由 徳 夫

**A Bibliographical Introduction
to Hosoi Kohtaku “*Kanga Hyakutan*”**

Norio NAGAYOSHI

群馬大学共同教育学部紀要 人文・社会科学編

第 70 卷 27—37 頁 2021 別刷

細井広沢 『観鷺百譚』 解題

群馬大学共同教育学部国語教育講座 永由徳夫

一、細井広沢の生涯

細井広沢（万治元—享保二十（一六五八—一七三五））は、江戸時代前・中期の儒学者・書家である。名は知慎^{ともちか}、字は固卿、また公謹。号は広沢（廣澤）の他、菊叢・思貽齋・蕉林庵・玉川・奇勝堂などの別号がある。万治元年（一六五八）、遠江国掛川において細井玄佐知治の次男として生まれ、十一歳の時に父とともに江戸に入り、朱子学をはじめ、書道・歌道・兵学・天文・測量・算法などあらゆる学問を涉獵した。

その博学多通なさまが見込まれ、元禄六年（一六九三）には、当時絶大な権勢を誇っていた柳沢吉保（一六五八—一七一四）に仕官を果たし、鉄砲組の組頭として二百石を与えられた。四十歳を迎えた元禄十年（一六九七）には、吉保の側近として、荻生徂徠（一六六六—一七二八）とともに徳川第五代將軍・綱吉（一六四六—一七〇九）に拝謁した。吉保は、綱吉の文治政治に恭順する意もあり、儒学者や文人との交流に熱心であったが、広沢とは同年生まれという誼もあつたか、昵懇の間柄であった。ところが、広沢は一身上の都合により、元禄十五年（一七〇二）、吉保からの禄を辞し、浪人の身となる。

広沢が致仕した理由については諸説あるが、一説に幕府側用人である松平輝貞（高崎藩主）との確執とするもの、また一説に、「忠臣蔵」で知られる赤穂浪士討ち入りに際し、広沢が陰で相当な加担をしていたから、というものがある。骸骨を乞う広沢に対し、義を重んずるその人となり吉保は理解を示したのであるが、幕府の中枢にいる吉保にとつては断腸の思いであつただろう。その後吉保は毎年五十兩（現在の約三三〇万円相当）の支援金を送り、親交を続けたといふ。

実は広沢は、赤穂浪士の一人、堀部安兵衛（武庸）と非常に親しい関係にあつた。剣術を堀内正春に学んだ際、その道場で師範代であつた安兵衛と意気投合したのである。現在、東京都中央区八丁堀の亀島橋西詰に、安兵衛を顕彰した「堀部安兵衛武庸之碑」が建碑されているが、その碑文の中に、「京橋水谷町、儒者細井次郎大夫家に居住」という一節がある。この細井次郎大夫とは広沢のことであり、安兵衛が細井宅に居候していたことがわかる。これほどの付き合いをしていたことから、安兵衛の広沢に対する信任はたいそう厚いものがあつた。元禄十五年十二月十五日未明の、かの討ち入り事件に際し、吉良邸に掲げられた趣意書「浅野内匠家来口上」作成に起草の段階から広

沢は深く関わっていたようである。また、安兵衛は自身の日記「堀部武庸筆記」も広沢に託している。真偽のほどは定かでないが、討ち入り当日には、広沢は自邸の屋根に登り、本所方面を眺めていた、という逸話も伝わるほどである。

さて、話を広沢の書に移すことにする。広沢の師・北島雪山（一六三六—一六九七）は唐様書を広めた草分け的存在であり、広沢は雪山の高弟であった。広沢の書における師については、「書、雪山先生授撥證法。入木道、持明院殿御門人 柳葉筑前守伝来」（『二老略伝』）とする記述がある。「書」と「入木道」が区別されている所が興味深い。唐様・和様それぞれを学んだことが伝わる。そのことが、後に書論を編む際の学究態度の礎となったであろう。

師・雪山亡き後、広沢は唐様書の第一人者として活躍し、その書風は一世を風靡した。広沢の門下からは、「四天王」と称される平林惇信（静齋）（一六九六—一七五三）、関忠恭（一六九七—一七六五）、三井親和（一七〇〇—一七八二）、松下烏石（一六九九—一七七九）など、次代の唐様書を担う錚々たるメンバーが輩出された（但し、この師弟関係には異論もあり）。また、子の九阜（一七二一—一七八二）も父・広沢の書法を継承し、唐様書の隆盛を確実なものとした。九阜は書法の正統性を唱えるべく、書論『墨道私言』を著している。

広沢は実作のみならず、書の歴史と理論に精通した上で、唐様の根本原理を著述する。書法・書学相俟って、後学に大きな影響を与えたのである。正徳四年（一七一四）、五十七歳の時に著した『紫微字様』では、唐様の淵源を明らかにし、享保四年（一七一九）、六十二歳の時に著した『撥證真詮』では、師・雪山の書法を称揚し、唐様の書法が王羲之以来の正統的な書法であることを提唱した。享保十年（一七二五）には『観鷺百譚』を著し、中国書論を中心に、日本書論も織り交ぜながらその卓見を披歴した。多才な広沢も、晩年は筆墨三昧の生活を送ったという。七十八歳でその生涯を閉じ、墓所は、現在、東京

都世田谷区等々力の満願寺にある。

細井家墓所（世田谷区満願寺）



前方左 広沢墓

前方右 九阜墓（二〇一八年八月一日撮影）

二、『観鷺百譚』序ならびに凡例

『観鷺百譚』は、和漢の書に関する故事・逸聞など百条を集録し、広沢の按語を付したものである。享保十年（一七二五）に著されたが、上梓は亡くなる直前の享保二十年ということになっている。本稿で扱う架蔵の版本『観鷺百譚』は、全五巻五冊よりなり、第五冊の奥付には「享保二十年乙卯歲孟春穀旦 江戸通油町 書肆 川村源左衛門梓行」とある。第一冊の冒頭に序文があり、本書執筆の動機と経緯が記されている。

本章では、まず、序文を翻刻する。なお、全文を翻刻した刊本には『日本書畫苑』第一（国書刊行会編、一九七〇）に所収される『観鷺百譚』があり、版本との文字の異同については注記する。版本における変体仮名は平仮名に改め、版本・刊本における漢字は原則として新字で表記した。また、版本に振られているルビの内、参看すべきものはそのまま振り、難読語にもルビを振った。なお、版本の写真は、架蔵の『観鷺百譚』である。

『観鷺百譚』

【序】

〇一丁表二行目〜十行目

〈翻刻〉

詩林に叢話すくなからず、和歌に雑談といふ有^{あり}。知慎^{ちしん}曾^かて来游の童生のために、臨池^{りんち}の雑談を集めんと思ひよりて、かたはし書^{かき}つらぬる事有、皆本文の正しき事のみを翻譯する也。和朝の故事は、漢土のよりは得がたし、因て聊^{いささ}か数条のみを載^{のせ}たり。命^{ちか}て『臨池夜話』とせんとおもへり。草稿いまだ脱せず、筐底^{かぶつてい}の白魚に供^くして、已に烏有^{ういう}に帰せんとす。

〈通釈〉

漢詩や和歌にはエピソード集といったものがある。そこで私（知慎）は、書を習いに来る童子たちのために、書に関する故事・逸聞を集め、片っ端から書き留めたのであるが、いずれも本文の適正なものを翻訳したのである。日本の故事は中国に比べると集めにくく、数条のみにとどまっている。名付けて『臨池夜話』としようと思ったが、いまだ草稿の段階を脱しておらず、箱の底の紙魚に食われ、もはや元の状態を失わなければかりである。

〈語釈〉

・臨池：書道・書字のこと。後漢の張芝が池に臨んで書を習い、そのために池の水が真っ黒になったという故事による。西晋の衛恒『四体書勢』に「弘農張伯英者、因而轉精甚巧。凡家之衣帛、必先書而後練之。臨池學書、池水尽黑」とある。張芝（字は伯英）は草書に優れ、後世、「草聖」と称せられた。曾鞏『墨池記』には、「羲之嘗慕張芝、臨池學書、池水尽黑」と、王羲之が張芝を慕い、その逸話に倣ったことが記される。

唐の孫過庭は『書譜』の中で、「入木」を王羲之に、「臨池」を張芝になぞらえ、「有乖入木之術、無間臨池之志」と自身の学書が王羲之の書法には隔たりがあるが、書の道への志は張芝にひけをとらない、と述懐する。

・筐底の白魚に供して：箱の底の紙魚に食われるさま。
・烏有に帰せんとす：「烏ぞ有らんや」より、何もない状態をいう。虫損によって元の状態を失うこと。

〇一丁表十行目〜一丁裏九行目

〈翻刻〉

是歳五月雨打つゞくころ、好問藤公の御許に詣たるに、其家に賜禽

コ」のルビあり。

○一丁裏九行目、二丁表九行目

〔翻刻〕

侍座 時うつりて、さまざまのものがたり競ひをこりけるほどに、知慎まうしけるは、晋の王逸少、山陰の道士のやしなへる鶯を求むとて、道德経を書て是に換たり、よりて此経を換鶯とよぶとかや、古人の風儀はおかしくやさしき事おほきものなりなど興じあへり。さてつくぐと其鳥を見るに、げに心のどかに、かたちをもくしく、翎毛潔白にして、声又瀏亮たり。頸、婉曲にして自在なる事、筆法にかよひておかしとかや、古人のおもひよれる、たゞならずとながめ居たり。

〔通釈〕

しばし時を過ぎ、さまざまな話に打ち興じているところで、私〔知慎〕が、かの晋の王逸少（義之）は、山陰の道士が養っている鶯鳥を求めて、「道德経」を書いて交換したことから、これを「換鶯経」と呼んだようである、と申し上げ、古人のやり取りには趣や風情があることが多いなどと興じあった。さて、その鳥をじつと見てみると、確かに心おだやかに、容貌にも威厳があり、羽毛は真っ白で、その鳴き声は清く明るい。頸がしとやかに動くさまは、筆法に通じて趣があるという古人の思い付きには、なるほどその通りだと眺めたのである。

〔語釈〕

・ものがたり：刊本「物がたり」に作る。

・おほきものなり：刊本「おほき者なり」に作る。

・王逸少：王羲之。逸少は字。

・山陰の道士の：『晋書』卷八十、王羲之伝に「性愛鵝。会稽有孤居姥養一鵝、善鳴。求市未能得。遂携親友命駕就觀。姥聞羲之將

おほし。白鵝錦雞、緑衣使者を初として、見なれぬ奇鳥さまざま有。又鶯といふ鳥、雙翼庭池に遊び、鶯々たる声高く、水に浴し、翅をたゞき、頸をのべ、尾を振て、意をえたりがほなり。是は日ごろ見ぬ事なれば、いかにと尋奉れば、官家より賜りぬ、卵を伏せしめて爾にも贈なんと宣ふ。

〔通釈〕

この歳、五月雨が打ち続くころ、好問藤公（大久保常春）宅を訪ねたところ、その家には下賜された鳥が多くいた。シラキジやキンケイ、オウムをはじめとして、さまざまの見慣れぬ珍しい鳥がいた。さらに、鶯（ガチヨウ）という鳥が、翼を広げて庭池に遊び、声高く鳴きながら水浴びし、羽をばたつかせ、頸を伸ばし、尾を振って、まるで我が意を得たりというさまである。これは日頃見かけぬことなので、いかがされたかと問い尋ねると、官家より下賜されたもので、卵を温めたら、そなたにも贈ろうと仰る。

〔語釈〕

・好問藤公：大久保常春（一六七五—一七二八）。江戸時代中期の大名。下野烏山藩初代藩主。江戸幕府の若年寄、老中。墓所は東京都世田谷区太子堂の最勝寺。

・白鵝錦雞 白鵝（シラキジ）と錦雞（キンケイ）。いずれもキジ科の鳥。

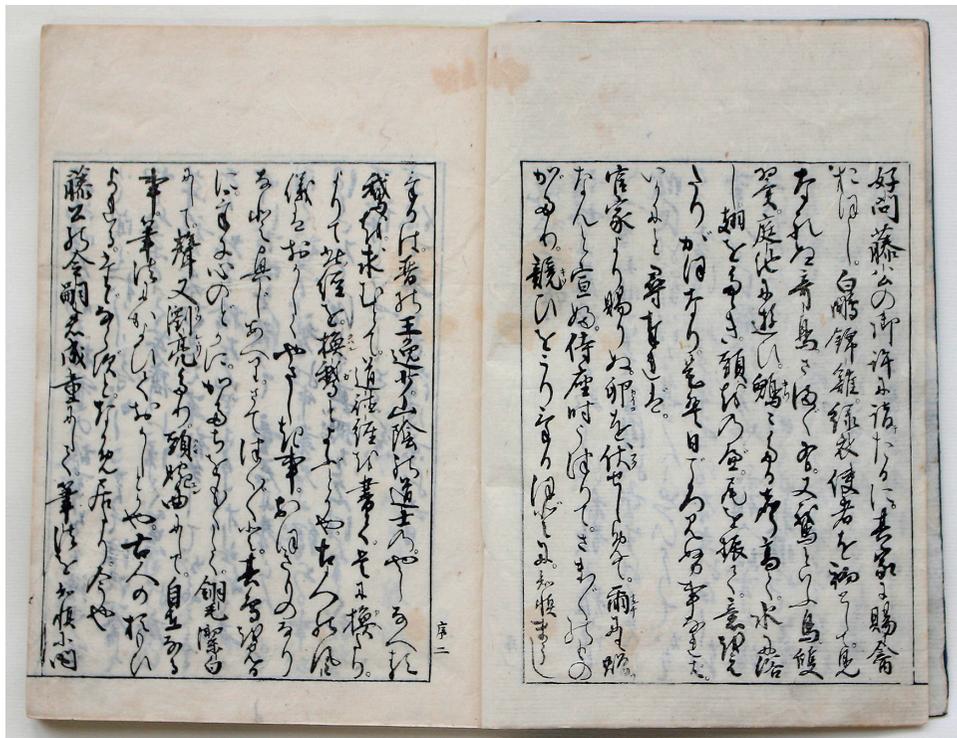
・緑衣使者：鸚鵡（オウム）のこと。羽の色が緑色であることから。

・鶯々：「ギツギツ」は鶯鳥（ガチヨウ）の鳴き声。但し、版本のルビは「キツ」。

『孟子』滕文公章句下に「悪用是鶯鶯者為哉」とあり、後漢の趙岐は「鶯鶯、鶯鳴声」と注する。

・頸：刊本「頭」に作るも誤刻。

・卵を伏せしめ：「伏卵」は、卵を温めること。版本「卵」に「カイ



至、烹以待之。義之嘆惜彌日。又山陰有一道士、養好鵝。義之往觀焉、意甚悅、固求市之。道士云、「為写道德經、当举群相贈耳」。義之欣然写畢、籠鵝而歸、甚以為樂。其任率如此」とある。
 ・換鷺：「道德經」を書いて鷺鳥と交換したことから、これを「換鷺經」とも呼ぶということ。「換鷺」は、書を請い求めること、また、書道の意でも用いられる。
 ・翎毛：羽毛。はね。
 ・瀏亮：清く明らかなこと。朗らかなこと。

○二丁表九行目〜二丁裏十行目

〈翻刻〉

今や藤公の令嗣君成童にして、筆法を知慎に問給ふ時なれば、換鷺の故事を語申せと聞えおはします。かしこまりて、演説一会してやみぬ。かくて茅齋に帰て、篋笥の底の草稿を求むれば、半散失してかたばかりなり。此ま、捨なんとするもおしければ、其が中に百条を綴りて、童君に奉らんとす。因ておもへり、鷺の中書君に縁ある事、おほかたならずとて、其冊を名づけて『観鷺百譚』といふことしかり。
 享保十年乙巳蒲月末の六日

〈通釈〉

今や、藤公の子息（大久保忠胤）も立派になられ、私（知慎）に筆法について尋ねられ、王羲之の「換鷺」の故事を話すよう仰る。恐れ慎みながら、ひとくさり演説し終えた。そのまま拙宅に帰り、箱の中の草稿を探してみるも、半ば散失して紙片ばかりであった。このまま捨て置くのも惜しく、その中から百条を綴って童君（忠胤）に呈上しようと考えに至った。そして思うに、鷺の中書君（王献之。羲之の第七子）に縁ある事、一通りなみなみでないことから、この一冊を名付けて『観鷺百譚』と命名したのである。

〔語釈〕

・令嗣君：大久保常春の嗣子・忠胤（二七二〇—一七七九）。

・成童：年齢のやや長じた者をいう。十五歳以上の少年。広沢が享保

十年（一七二五）に忠胤に『観鷺百譚』を授けた時、忠胤は数え

十六歳。

・語申せ：刊本「語り申せ」。

・享保十年乙巳蒲月末の六日：「蒲月」は陰暦五月の異名。よって、

享保十年五月二十六日に記したことがわかる。刊本や他の版本

（『日本書論集成』所収本）にはこれに続けて「廣澤藤（膝）知

慎 敬識」とある。架蔵の版本は落丁によるか、署名は見えない。

〔補説〕

夫 『観鷺百譚』として知られる本書は、当初『臨池夜話』とする構想
徳 があったが、その草稿は虫損によつて失われつつある状態であつたよ
由 うである。好問藤公（大久保常春）邸を訪問した際、同家に下賜され
永 たさまざまな奇鳥（珍しい鳥）がいる中で、広沢は鷺鳥の動きに目を
留める。

広沢は、鷺鳥を見る機会がなかつたのであろう。鷺鳥の動きに興味
を持ち、王羲之が鷺鳥を欲して、「道德経」を書いてこれと交換し
た、という故事を思い出したのである。この故事は、広沢にとつて、
非常に印象深いものであつたようである。『観鷺百譚』第一談は「王
右軍 換鷺道德経」（王右軍 鷺に換ふる道德経）という題目で、この
故事について検証している。
なお、林羅山『羅山先生文集』巻七・第二十四条に興味深い論証が
あるので、以下に引用する。

山陰の道士 群鵝を養ふ。王羲之之を求む。道士請ふ、道德経を
写さば則ち群を挙げて以て之を許さんと。羲之 為めに老子五千言

を書し、道士に昇しむ。即ち鵝を籠し、皆な携へて還る。故に
世 道德経を号して換鵝経と為す。然れども李太白 道德経と云はず
して黄庭経と云ふ。説く者皆な以為へらく未だ詳らかならずと。余
頃ろ山堂肆考を見るに、王 黄庭経を写し、以て鵝に換へて去る。
且つ謂へらく鵝の屈伸 項を縮むるの態、筆法に似たること有り。
故に王 甚だ之を愛す。埤雅に「鵝善く其の項を旋転す。古の書を
学ぶ者、法つて以て腕を動かす」と。（原漢文）

羅山が典拠とする『山堂肆考』を繙くと、卷一三三の「為道士写
経」に、「山陰道士好養鵝。王羲之往觀焉。意甚悦。因求市。道士
云、為我写道德経。当举群相贈。羲之写畢、籠鵝而去」とあり、ま
た、卷一四八の「贈鵝」に、「僊伝拾遺道士、管霄霞籠紅鵝一双、遺
王羲之。請書黄庭経曰、此鵝乃僊鵝也。後果飛昇去。按埤雅鵝善旋
其項。古之学書者、法以動腕。故羲之好鵝」とある。また、卷二十四
の「玩鷺」、「羲之滌墨」の条でも、王羲之と鷺鳥について記述する。

続けて、凡例を示す。『観鷺百譚』では、序文について、凡例六項
を載せる。これをすべて翻刻し、必要に応じて項ごとに語釈を付す。

〔凡例〕

○三丁表二行目より十行目

一 此冊子に載る物語、其出書をしるさず、是亦古き書の一体なり。
又出書さのみ奇書異聞にもあらず、臨池家の常話なればなり。

知慎、篋笥中の臨池夜話に、悉く出書を記す。是老耆の遺忘に
備るためなればなり。

一 臨池の雑談何ぞ是に盡ん。臨池夜話に猶許多あり。老境若問暇あ
らば、続編を綴らむと欲す。しらす能せんや、いなや。

〈語釈〉

・間暇：閑暇。

○三丁裏一行目、八行目

一 筆法の意味を説たるは、高妙にして、假名に書取事を得ず。因て是を洩す。此冊子には、専筆硯につきたる物語をしるす。

〈語釈〉

・高妙：高妙。

一 雑談、同じ類の事は、一列に編んと欲すれども、老懶厭はしく、殊にもと見るに従て簡記せしものなれば、散乱して次第なし。会稽・王氏、呉興・趙氏、衡山・文氏、などの事、各前後乱雑なり。重複もおほかるべし。

〈語釈〉

・簡記：書物を読んで得たことを随時書き記したもの。

・会稽 王氏：東晋・王羲之（三〇三—三六二）。王羲之は会稽山（浙江省紹興）に居住した。

・呉興 趙氏：元・趙孟頫（一二五四—一三二二）。趙孟頫は呉興（浙江省湖州）の出身。

・衡山 文氏：明・文徵明（一四七〇—一五五九）。衡山はその号。

○三丁裏九行目、四丁表八行目

一 此冊子に、義之を逸少と書、右軍とも、会稽とも、瑯琊ともいひ、子昂を孟頫と書、集賢とも、呉興とも、文敏とも、松雪とも、魏公ともいひ、徵明を徵仲とも、衡山とも、待詔ともいふは、幼学をして、古賢の称をしらしめん為也。因て其分註に断を書す。餘皆之に倣へり。

〈語釈〉

・義之：王羲之。逸少は号。右軍は官職。会稽・瑯琊は居住地。

・子昂：趙孟頫。子昂は字。号は松雪道人。呉興は出身地。魏国侯に封ぜられ、文敏と諡された。

・徵明：文徵明。徵明、徵仲ともに字。衡山は号。翰林院待詔は官職。

一 巻頭に、王羲之、趙子昂、文徵明と、次第して書記し、百百談に、徵明の德行、文詞、世系、寿量を以て、筆をとゞむるは、聊微意ある而已。

〈補説〉

凡例により、広沢の執筆態度を窺うことができる。

まず、第一項では、下敷きとした『臨池夜話』には備忘のために、百譚の出典名を記したが、『観鷺百譚』を編み直した際には省略した。それは、奇書異聞の類ではなく、よく知られる話を採録したからである、と述べる。書論の採録に当たり、広沢が意を尽くしたさまが窺える。

第四項では、類話は同じ項目でまとめたかったが、老懶のため厭わしく、順序次第のないものになってしまった、と謙遜する。第五項では、同一人の名称を統一せず、異称をさまざまに用いたのは（例…王羲之を義之、逸少、右軍、会稽、瑯琊等と呼称すること）、幼学のために、古賢の名称を教えるためである、とする。この一文は興味深く、広沢の後進を育成せんという心意気が伝わってくる。

最後の第六項は、広沢が王羲之・趙子昂・文徵明を尊崇する態度を明らかにしたものである。王羲之（第一談）より始め、趙子昂（第二談）、文徵明（第三談）と順次進み、最終の第百談を文徵明で締める、という構成になっており、この編集について、広沢は「聊か微意あるのみ」と記す。その少々考えがあったという広沢の意図は、全百

譚の標題(目録)から窺い知れる。

第九十四談 呉興金剛経仲穆継
第一百談 衡山德行世系寿量

三、『観鷺百譚』における王羲之・趙子昂・文徵明の尊崇

唐様の第一人者である広沢が尊崇した書家は、王羲之・趙子昂・文徵明の三名である。

ここに、全百譚において、王羲之・趙子昂・文徵明に関わる標題(目録)を列挙してみることにする。

- 第一談 王右軍換鷺道德経
- 第二談 趙集賢得晋人正脈
- 第三談 文衡山与趙公抗行
- 第七談 右軍蘭亭敘入昭陵
- 第十談 右軍東坡山谷濃墨
- 第十三談 文衡山祝支山優劣
- 第十四談 右軍筆陣図為偽作
- 第十五談 趙呉興多代筆贗書
- 第十六談 右軍大令橘梨三百
- 第四十談 松雪書菴題署推讓
- 第五十一談 衡山鑑定呉人承恵
- 第五十六談 大令除改右軍壁書
- 第五十七談 趙文敏書神速如風
- 第五十八談 呉興写竹与八法通
- 第六十二談 王家七郎執帚書壁
- 第六十八談 祝京兆跋趙呉興書
- 第七十談 右軍真草誤刮茱几
- 第七十六談 右軍十二竊父秘書
- 第八十七談 王帖三千一丈二尺

以上のように、王羲之・趙子昂・文徵明の名に関わる標題を列挙するだけでも百譚中、二十一談に上り、広沢がいかにかこの三人を尊崇していたか明らかであろう。また、標題に関わらなくとも、三人の名は随所に見られる。鈴木晴彦氏の詳細な調査結果(「細井広沢考―『観鷺百譚』を中心に―」、『観鷺百譚』人名頻度別一覽表)に拠れば、『観鷺百譚』に取り上げられる四百余名の人物の中で、登場回数第一位が王羲之の三二回、第二位が王献之と趙孟頫の一八回、以下、米芾一六回、文徵明一三回、蘇軾一二回と続く。但し、登場回数が多いからと言って、必ずしも広沢がその人物を手放しで評価していたわけではない例もあり、注意する必要があるだろう。たとえば、王羲之の息子である献之に対しては、相当高い評価はするものの、あくまで羲之に次ぐものと捉えている。第五十六談では、羲之が壁に揮毫して出掛けた後、献之がそれを拭き取って書き直し、我ながらうまく書けたとご満悦のところ羲之が戻ってきてそれを見、「我出し時、大に酒に酔たるならん」と嘆息した、という逸話が記されている。

第十三談では、文徵明と祝允明の優劣を比較し、世間では祝允明の方を高く評価するが、正脈とは言えないとして、文徵明に軍配を上げている。祝允明も五回を数え、第一五位に入っているが、登場回数は斯様な事情にも因るのである。

『観鷺百譚』は、主として中国書論を引用しながら、広沢が按語を付したものであるが、奇想天外な逸話に対しては、それを却下する姿勢が窺える。たとえば、第六談「張長史劍器搥髮誤」では、俗言として伝わる、張旭が頭髮に墨を浸して大声で叫びながら揮毫したという逸話について、「筆を揮ひて、時に大に叫びしと也、揮毫とあれば、頭髮にて字を書たるにあぬ事明也」と記す。書に対する熱情を懐き

ながらも、沈静な客観的視点を有し、荒唐無稽な話は、あくまで一つの言い伝えとして捉えるのである。これは、序文冒頭にある「皆本文の正しき事のみ翻訳する也」という真摯な学究態度が反映されたものである。

また、日本の能書や文学にも目を配り、日中融合の様相を呈しているのは大変興味深い。ここに、日本に関連する標題をいくつか抜き書きしておく。第十一談「日本書法中国称揚」（和朝の書法が、後漢の時代に既に称揚されていたこと）、第十九談「伊勢源氏事抄筆墨」（目錄では「伊勢源氏事抄筆事」。紫式部は筆法をよく理解していること）、第三十二談「天嘗会殿額御屏字」、第六十五談「弘法大師鼠跡心経」、第七十八談「和朝額字佐理神妙」、第八十三談「行成扇面字上御几」、といった具合である。「大嘗会屏風」の揮毫がいかに重要事であるかは、世尊寺家六代目・藤原伊行がその著『夜鶴庭訓抄』（一一六五頃成立）で既に述べている。広沢が日本の書において、どのような事柄に関心を寄せていたか、その一端を窺うことができよう。

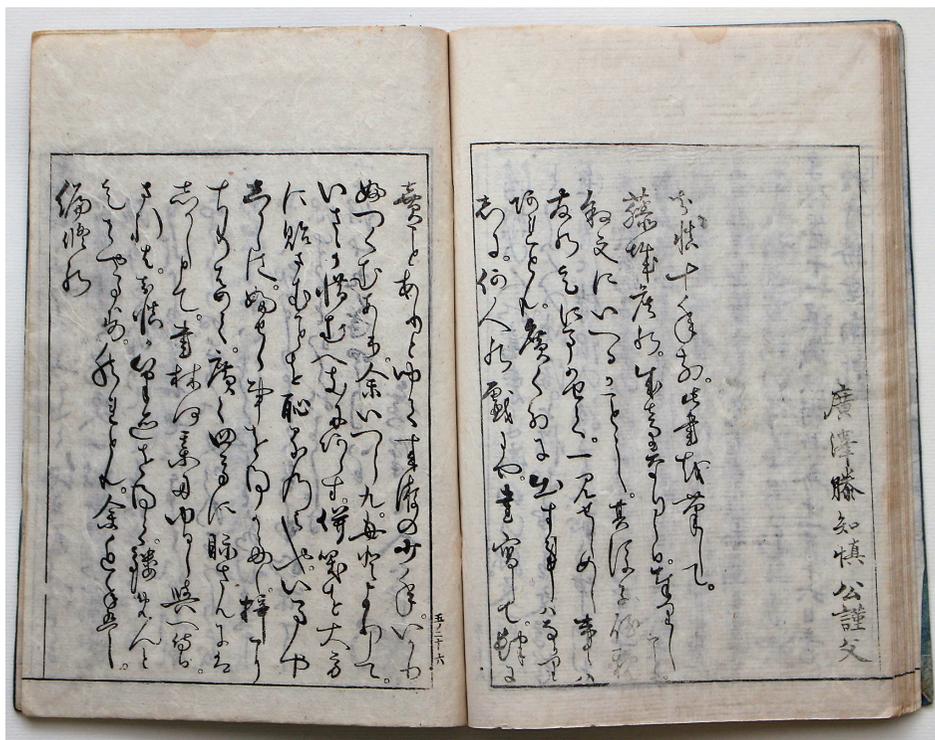
四、『観鷺百譚』跋

本章では、第五冊の末尾に記された跋文を翻刻する。本文に見られる書風とは相違があり、草書を多用した流麗な筆致を示している。跋文に従えば、広沢自身の手跡ということになる。

【跋】

〔翻刻〕

知慎十年前、此書を筆して、藤城侯の成童なりし日、奉りしこと、叙文にいへるがごとし。其後、子侄・親友の言にまかせて、一見せしめし事はあれども、広く外に出す事はなかりしに、何人の戯にや、書写して肆に売ることありと聞て、来游の少年、いかりふつむくあり。



『観鷺百譚』 跋

余いへらく、もとよりしていさゝか惜むべきにあらず。併笑を大方に貽おこさむことを恥るのみ也。いまやしからば、ふせぐ事を得がたし。梓にちりばめて、広く四方に眺しらさんにはしかじとて、書林何某にゆるし与へ侍る。されば、知慎が筆迹ひつせきを得て鏤おぼめんと乞てやまず。然れども、余近年は編修の教命にかたぶきて、他に及ぶいとまなし。よて老友一枝翁の写本を強てこひとりて、是をあたへぬ、翁はもとより書名世に高ければ、劖きげ劖望たりぬ。さるに又そのことほりを、知慎にかいつらねよと求むる事至て切なり。よて其本の末に録することかくのごとし。時、享保十九年四月八日、広沢老人知慎（花押）

〈通釈〉

夫 徳 由 永
私（知慎）は、十年前、本書を書き著して、藤城侯が十五歳になられた日に奉じたことは、序文に書いた通りである。その後、親族や朋友に頼まれて一見させたことはあるが、広く外に示したことはなかったのに、だれの戯れか、これを書き写して書肆に売る者がいるということを知り、来訪の少年が憤慨している。私が言うことには、もちろんいささかも惜しむべきものではない、と。ただ、失笑を多くの人に残すことを恥じるのみである。しかし今や、それも防ぐことは難しい。それであるならば、出版して、広く四方に示すには及ばないだろうと考え、書林何某に許可を与えたのである。そうであるならば、と書肆は私の筆跡で梓行したいと懇請する。しかしながら、私は近年は編修に命をかけているので、時間を割くことができない。よつて老友一枝翁の写本を強く要請して入手に、これを与えたのである、翁は日頃より書名が世に高ければ、上梓の望みに応えるに十分である。しかし、それでは満足せず、事の顛末をどうしても私に書けと切望するのである。よつて、このように末尾に著録した次第である。時、享保十九年四月八日、広沢老人知慎。

〈語釈〉

- ・子侄：子やおい。
- ・梓にちりばめて：梓に鏤めるとは、版木に刻む、すなわち出版するの意。版木に梓の木を用いたことによる。
- ・書林何某：奥付には、「書肆 川村源左衛門梓行」とある。
- ・筆迹：刊本「筆蹟」に作る。
- ・劖劖：劖・劖は彫刻用の小さな刃物。上梓する。梓に刻む。梓に上す。

〈補説〉

跋文では、上梓に至る顛末が広沢の自筆で書かれており、興味深い。一少年のために稿を成してから十年、漸く本書は日の目を見たのである。『観鷺百譚』は、後世に大きな影響を与えた書論である。およそ半世紀後の安永四年（一七七五）には、中山高陽（一七一七—一七八〇）の批正による『観鷺百譚批考』が編纂されたほどであった。『観鷺百譚』は後学のための道標となる一書であるが、広沢書法の神髓は、本書第九十五談でも語られる「把筆撥證不用苦緊」にある「撥證法」を標榜したことにある。

総括

広沢には書に関する多くの著述があるが、中でも『紫微字様』『撥證真詮』『観鷺百譚』は広沢書論三部作といつてよいであろう。

『紫微字様』は、当時流布していた明の黄鑿・黄鉞兄弟の編による『内閣秘伝字府』を批判し、文徵明の書を標榜して唐様の淵源を明らかにしたものである。文徵明ならびに師の北島雪山、そして広沢自身こそが、二王（王羲之・猷之）以来の正脈であり、これは「撥證法」を相承することによって成り立つと主張する。

『撥證真詮』は、「撥證法（撥證法）」の真髓を明らかにし、広沢流こそが王羲之以来の正統的な唐様の書法であることを証明しようとしたものである。広沢は『曲礼全経』に収める書法詮要第四の中の執筆法を著録し、従来の和様の単鉤法を排し、双鉤法を是とする。『曲礼全経』は、既に貝原益軒が『心画軌範』の中で引用するが、広沢はこれを訳して詳細な説明を付している。日本書学における「撥證法（撥證法）」は、広沢によって実質的に端緒が開かれたといっても過言ではないだろう。

書学書道史分野では一般に、当時流儀書道として陋習に陥っていた「和様」の対立軸として「唐様」が興起したと捉えられているが、実のところ「唐様」はかなり初期の段階からその書風をめぐって唐様同士での対立が激化していた。「和様」は家の書を墨守するために内向きにならざるを得なかったが、「唐様」はその書の正統性を世に示さんとすると多分に排撃的な様相を呈していたからである。当時、儒学をめぐって朱子学派と陽明学派の対立が顕著なものとなり、諸派の乱立を招いたが、これと同様の現象が唐様書においても起こっていたといえよう。諸派が乱立する中で、義憤の士である広沢は、『紫微字様』『撥證真詮』の二著を根幹として、他流を完膚なきまでに論駁したのである。

それに対し、『観鷺百譚』の趣旨はだいぶ異なる。まず、和漢の書に関する故事・逸話など百条を集録した、ということが、前例のないことである。また、この百条に広沢が按語を付すことにより、唐様書の根本原理を明らかにしたということも大きな特徴である。広沢の著した他の書論が、多分に同時代の書家を論破することを目的としたのに対し、『観鷺百譚』は後学の士に教授するという視点を有している。その広沢の眼差しは、幾許か穏やかである。

前身に当たる『臨池夜話』から『観鷺百譚』に至る間、故事・逸話を百条に絞り込むのに、相当な労力を割いたことは想像に難くない。

唐様書家の筆頭と目される広沢が、中国書法のみならず、日本の書道に関する故事も渉猟したことは、特筆に値する。今日でも、この百条の多くが、日中書道史における基礎知識として捉えられていることは、大いに注目すべきであろう。

本稿では、『観鷺百譚』の序・凡例・目録・跋に基づき、問題をまとめることを主眼としたが、今後は一条一条を具体的に解釈していくことで、広沢の説く唐様書の真髓を明らかにしていきたい。

〔参考文献・参考論文〕

- 『日本書論集成』第三卷 汲古書院、一九七八
『日本書畫苑』第一 国書刊行会、一九七〇
『精萃図説書法論』第九卷 西東書房、一九九一
米田彌太郎『近世日本書道史論攷』柳原書店、一九九一
米田彌太郎『近世書人の精神と表現―続近世日本書道史論攷』柳原書店、一九九一
九

- 『三村竹清集』第四卷（近世能書伝）青裳堂書店、一九八三
鈴木晴彦「細井広沢考―『観鷺百譚』を中心に―」『書学書道史研究』第二号、書学書道史学会、二〇一一

- 永由徳夫「江戸時代の書論（4）細井広沢『観鷺百譚』『修美』第一二八号、二〇一七

〔付記〕

本研究は、JSPS 科研費・基盤研究（C）「近世書論を基盤とする『日本書論史』の展開」（課題番号：20K00122）の助成を受けたものである。

（令和二年九月三十日受理）

